



絵馬 踊り子図 (大原神社蔵)
(福知山市有形民俗文化財)

志水文庫の大津絵と 大原神社の絵馬「踊り子図」図録



大津絵 八臂大神像 (志水文庫蔵)

場所 古典芸能研究センター展示室
日時 二〇一八年二月五日(月)～

三月三〇日(金)

大津絵について付タリ展示の趣旨

志水文庫の資料には、江戸時代の大津絵6点(展示15、18、20・21)、明治時代の天津絵10点(展示3、1、10)がある。志水文庫の旧蔵者である信多純一先生は、近松門左衛門作の浄瑠璃『傾城反魂香』(展示10)についての論考があり、その中で、文中に現れる大津絵の画題に言及、以後、大津絵に深い関心を寄せられてきた。そしてその集大成が、二〇〇九年に思文閣から出版された『祈りの文化―大津絵模様・絵馬模様―』という著書になる。この本の中で、「藤娘のルーツ」として福知山市三和町にある大原神社の絵馬「踊り子図」について言及されている。今回、大原神社宮司の御厚意により、その貴重な絵馬「踊り子図」(展示19)も展示することができた。

大津絵は、京都と近江の境である追分の地で、近世以来土産物として売られてきた素朴な絵画である。その始まりについては、明確なことは分からないが、現存する大津絵では、寛永期に描かれた「雨宝童子」(大津歴史博物館蔵)が最も古いものであるという。また、寛文元年(1661)刊の『似我蜂物語』に「大津あはた口の道にて売天神の御影をひつはり」とあるのが文献に現れる早い例となる。大津絵関連の文献では必ず引用される、松尾芭蕉の句「大津絵の筆のはじめは何仏」は特に有名であるが、俳諧・狂歌には大津絵を詠んだものが少なからずあり、また文学作品の中にも、大津絵を取り込んだものが多くある。土産物として売られるだけではなく、大津絵の画題は近世の文化に様々な形で浸透していたのである。

大津絵の創始者については、「浮世又平」によって始まったという伝説がある。これは、後の解説パネルで述べるが、浄瑠璃『傾城反魂香』によって生まれた伝説である。この浮世又平創始者説に関する考証はすでに江戸時代に始まっていた。今回の展示では、こうした関連作品や大津絵の作者を考証した書籍も展示している。

大津絵の画題には、宗教性の強いものと世俗的なものがある。よく知られている「藤娘」「鬼の念仏」などは、後者の代表例であろう。初期の大津絵は宗教的なもので、それが次第に世俗的なものへと変化していったと考えられている。ちなみに、志水文庫蔵の江戸時代の大津絵は、すべて宗教性の強いものすなわち、仏画4点と神像画2点からなる。これは、信多先生が、大津絵だけではなく近世の神仏版画の蒐集者でもあったことと関連する。

近世後期には、大津絵そのものは廃れてしまいが、近代になると大津絵の再評価が始まる。日本画家や洋画家の中に大津絵に着目するものが顕れる。そして、民藝運動の柳宗悦は、大津絵を「民画」と位置づけてその再評価を行うのである。柳宗悦の大津絵研究『初期大津絵』(1926)は、現在も大津絵研究の必読書、基本図書として読まれ続けている。同時代の篆刻家楠瀬日年もまた、大津絵の研究に携わり、江戸時代の大津絵を模写、それを木版刷りと合羽刷りにした『大津絵』を一九二〇年に上梓している。この本の中には、現存しない大津絵の画題がいくつもあるのである。そして近年、大津絵は再び脚光を浴びつつあるようである。二〇一六年クリストフ・マルケ氏著『大津絵民衆の諷刺の世界』(角川ソフィア文庫)が刊行される。これは大津絵の研究書でありなおかつ先述した楠瀬日年の『大津絵』の紹介でもある。二〇一七年二月美術雑誌『美術フォーラム21』36号では、大津絵の特集が組まれ、大津絵に関する様々な知見が提示された。

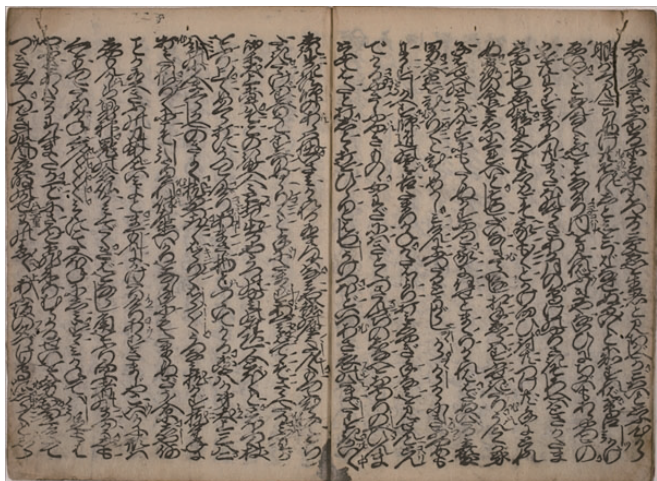
こうした動きの中で、センターでも、志水文庫の大津絵と大津絵に関わるいくつかの資料を組み合わせた展示を行うこととした。

★本展示の資料は、大原神社の絵馬と数点の洋装本を除くと、すべて志水文庫蔵、すなわち信多純一先生による蒐集品である。

- ・本展示の解説は、古典芸能研究センター非常勤研究員川端咲子による。解説執筆に際しては、個別には記していないが、信多純一著『祈りの文化』、クリストフ・マルケ著『大津絵』、美術雑誌『美術フォーラム21』36号所収の諸氏の論考を参考にした。
- ・大津絵の画題に関しては、右記二書に依った。



『似我蜂物語』挿絵
(『仮名草子集成』より引用)



10 傾城反魂香 (十行本)



8 修紫田舎源氏 二編上冊



9 江戸中村座の辻番付



11 〔桜時花吉原〕



15 大津絵 大日如来



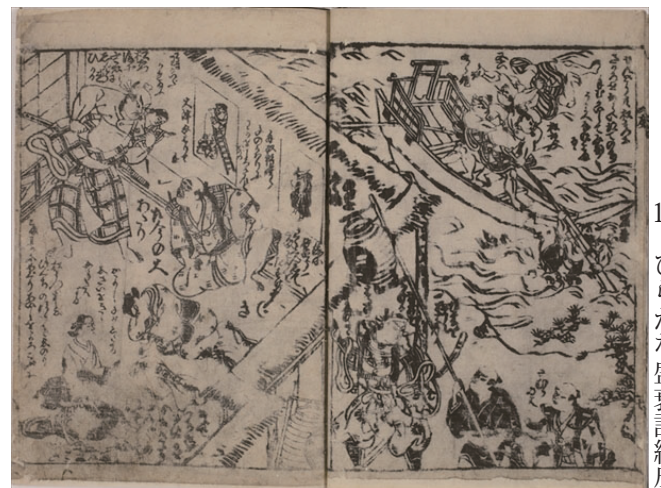
12 浮世又平名画奇特



13 ひらかな盛衰記(七行本)



16 大津絵 阿弥陀仏



14 ひらかな盛衰記絵尽



19 大原神社絵馬 踊り子図



17 大津絵 阿弥陀三尊来迎



21 大津絵 天神



20 大津絵 八幡神



18 大津絵 十三仏



22 呉春画 鬼の寒念仏



23 地しんどう化大津急ふし



25 程方流行大津絵



24 狂画大津絵

大津絵と近世文芸

1 大津追和気 『稀書複製会叢書』「追分絵」より
宝永六年頃刊行の絵俳書。序文を平時庵淡々が記す。
珍舎編、等碩画。
大津絵の画題四十二種に句を寄せたもの。当時の大津絵の画題を知ることのできる貴重な資料。

2 狂歌画本大津みやげ（稀書複製会本）

安永九年刊行の狂歌絵本。白縁斎梅好編、大坂塩屋三郎兵衛刊。刊年はないが、序文から安永九年中に刊行されたと推定される。

大津絵の画題三十六種に狂歌を添えている。大津絵は、大津在の絵師権次に描かせたらしく、1の『大津追和気』とは異なり、大津絵師の描いた絵である点が貴重である。

3 明治二十七年版 大津絵十種

日本画家の久保田米僊が制作した彩色木版。
近代の日本画・西洋画の画家達には、大津絵に興味関心を抱いた者が少なからずいた。この大津絵十種は、日本画家の久保田米僊が明治27年に制作したものである。大津絵十図はいずれも大津絵の画題を踏襲しており、「米僊筆」と書かれて朱印「へいせむ」が押されている。また下部には、「明治廿七年六月廿日発行 近江國滋賀郡大津町大字橋本第五十三屋鋪著作者兼発行人 中川利助／同縣同郡同町同番地中川印刷所 同縣同郡同郡同町大字下北國第五十四番屋鋪印刷人西村貞二郎」とある。

4 東海道名所図会

大本 六巻六冊 秋里籬島著 寛政九年十一月刊
『伊勢参宮名所図会』と『東海道名所図会』（パネル展示）の「追分」には、大津絵を売る店の様子が描かれている。『伊勢参宮名所図会』では追分の風景が描かれ、『東海道名所図会』には大津絵の店が拡大して描かれている。どちらも壁に大津絵が掛けられ、店頭で絵

師が大津絵を描いている様子が描き込まれている。

5 やしなひ草 初編

半紙本 二巻一冊 心学書 天明四年
京山本長兵衛他刊
脇坂義堂著 下河辺拾水画

『やしなひ草』著者の脇坂義堂は心学者手島堵案の門人。大津絵の「瓢箪鯨」「提灯に釣鐘」などに道歌を添えて、教訓を示している。

6 近世奇跡考

半紙本 五巻二冊 山東京伝著の考証隨筆
文化元年五月序 志水文庫蔵本は明治の後印本

『近世奇跡考』では、浮世絵の創始者と目される浮世又平と岩佐又兵衛に関する考察がされている。京伝はこの他に『骨董集』でも「大津絵の仏像」という項目で大津絵についてふれている。

7 好色一代男 巻三

大本 一冊 井原西鶴作浮世草子 天和二年刊
巻三ノ四「集礼は五刃の外」には「屏風の」押絵を

見れば、花かたげて、吉野参の人形、板木押の弘法大師、鼠の嫁人、鎌倉團右衛門、多門庄左衛門が、連奴、これみな、大津の追分にて、書し物ぞかし」という一文がある。必ずしも大津絵の画題とは一致しないが、「大津の追分」で書かれた絵とあるので、大津絵を指すと考えられている。

8 修紫田舎源氏二編上冊

中本 三十八編七十四冊
柳亭種彦著 歌川国貞画

二編刊行は天保七年 江戸鶴屋喜右衛門刊
『源氏物語』の世界を足利義政の時代へ移して描いた長編合巻。文政十二年から天保十三年成立。二編上冊の見返しに大津絵の画題「鷹匠」の軸が描かれている。

大津絵と演劇、大津絵と浮世又平

『伊勢参宮名所記』には「昔土佐の弟子浮世又平といふ者此所に住て旅客に絵を鬻ぎしより以来今に此地の名物とはなれり」と記した後に「是何の書にも見る事なし全く近松門左衛門が戯作よりかく名高くなりたるなるべし（以下略）」と注記されている（展示4参考資料）。大津絵の創始者が浮世又平であるという伝説は、近世を通じて広く人口に膾炙していた。

この「近松門左衛門が戯作より」名高くなった浮世又平とは、近松門左衛門作の人形浄瑠璃『傾城反魂香』（宝永五年竹本座初演↓展示10）の登場人物である。『傾城反魂香』の中で又平が活躍するのは上の巻の後半である。

浮世又平は土佐光信の弟子であるが、生来吃りで、大津追分まで土産物の絵を描いて生計を得ている。師の光信の元へ恒例の機嫌伺いに行き、弟弟子の修理之介が土佐の名字を許されたことを聞く。自分にも土佐の名字をと願うが許されず、死後に名が残るようにと一念を込めて手水鉢に自画像を描くと、その筆勢が石の裏にまで届くという奇瑞を見せる。これを見た師は又平に土佐又平光起の名を許し、佐々木家の姫君銀杏の前を救出しに行くようにと命じる。

出立しようとする又平の所へ、銀杏の前が逃げ込んでくる。不破伴左衛門ほかの追っ手が来る中、又平が生計のために描いていた絵から、絵柄が抜け出して追っ手を散々な目にあわせる。

近松門左衛門によって作り出された浮世又平というキャラクターにモデルがあったかはわからない。しかし、このキャラクターは、近松以後独立したキャラクターとして演劇・文学に登場するようになる。（↓展示11参照）

現在文楽や歌舞伎で上演されるのは、「土佐将監光信の庵の場」のみであるが、後世に影響を与えたのは、むしろその後の「逢坂関又平の住家の場」であった。又平が描いた絵、すなわち大津絵から絵の精が抜け出すという趣向が、演劇や文学に踏襲されていく。特に

歌舞伎では、大津絵の精が次々と登場する変化舞踊として受け継がれていく。

当初は、『傾城反魂香』と共に上演されたり、浮世又平が登場する歌舞伎と共に上演されていたが、次第に浮世又平の物語からは独立した舞踊として上演されるようになっていく。さらには大津絵から抜け出した精という本来の性格からも離れ、単体で上演されるようになる。文政九年(1826)中村座で『傾城反魂香』の後に上演された変化舞踊『哥へす哥へす余波大津絵』の中の一所作事であった「藤娘」が、現在は単体の所作事として上演されているのなどはよい例であろう。

9 江戸中村座の辻番付

寛政三年(一七九二)五月上演。上演演目は「艶容浪花姓」と「五月菊名大津絵」。所作事の「五月菊名大津絵」も、大津絵の精が絵から抜け出して踊るという趣向の舞踊である。肩に担げた藤の枝におかめの面を付けた藤娘、奴が持つ毛槍を手にする若衆、鬼の念仏の鬼の面・奉加帳・衣を手に持つ座頭が描かれる。

配役は、藤娘：岩井半四郎(四世)、若衆：瀬川菊之丞(三世)、座頭：市川八百蔵(三世)である。

10 傾城反魂香

半紙本 十行本(一部十一行本) 一冊

『傾城反魂香』は、近松門左衛門作の浄瑠璃。宝永五年(推定)竹本座初演。宝永五年二月に没した江戸の歌舞伎役者中村七三郎追善として近松が作劇した作品と推定されている。元禄十一年に京都で中村七三郎が演じた『けいせい浅間岳』は、大評判であったが、『傾城反魂香』には、その『けいせい浅間岳』の趣向が取り入れられているという指摘がある。

11 『桜時花吉原』

大判錦絵 三枚 一勇齋国芳画 川口屋正蔵版

うき世又平：関三十郎、六字南無右衛門実はさくら三八：中村芝翫、又平女房おつた：岩井杜若。

上部に三者の台詞が書かれている。刀と錫杖で打ち合う三十郎と芝翫の後ろには、大津絵を貼った屏風が

倒れており、三十郎の後ろには絵具皿と筆が見える。極め印はあるが干支の印がないため、板行の年は不明である。これと似通った錦絵が二種ある。一つは早稲田演劇博物館所蔵、もう一つはボストン美術館蔵である。この内、演劇博物館蔵の錦絵は、志水文庫蔵と同じ一勇齋国芳画で、配役も一致するが、構図は少し異なる。ボストン美術館蔵の錦絵は、五渡亭国貞画で、構図は志水文庫蔵のものと似通うが、「又平女房おつた」ではなく、瀬川多門扮する「又平娘おりう」が描かれる。さて、関三十郎と中村芝翫が同座し、それぞれ「浮世又平」と「六字南無右衛門」を演じたのは、天保四年三月三日から江戸中村座で上演された『桜時花吉原』である。これは、近松門左衛門作『傾城反魂香』の世界を利用した作品であることが確認できる。ただし、又平女房は中村芝翫が、娘は瀬川多門が演じている。つまり、ボストン美術館蔵の錦絵と一致するのである。志水文庫と演劇博物館のものは早い段階での予定稿と考えてよいだろうか。

12 浮世又平名画奇特

大判錦絵 二枚 一勇齋国芳画 越村平助版

嘉永六年

浮世又平が大津絵を描いていると、絵から藤娘ほかの画像が抜け出してくるという図。10の『傾城反魂香』から生まれた趣向の一つ。国芳には同趣向の「流行逢都絵希代稀物」(嘉永元年)がある。

この絵は、浮世又平以下すべて役者の似顔絵になっている。『藤岡屋日記』嘉永六癸丑年七月条に、この絵が大評判になったことが記されている。絵に様々な評判が付される中で、絵の中の文字が忌諱にふれ、発売停止となってしまう。詳細については、鈴木重三編集『国芳』(平凡社)の解説に以下のように書かれている。

鷹匠若衆の左袖に「かん」と書いてあるところから疍公方といわれた十三代將軍家定を宛てたと風評が立ち、八月には大いに売れた由を伝え、忌諱にふれ、板元は販売停止、板木ならびに手持ち品没収、刊行を許可した行事は入れ替えとなる。

なお、発売停止に至ったのは、ペリーの浦賀来航に

右往左往する幕閣を揶揄した図であるという風評の為此という説もある。

13 ひらかな盛衰記

半紙本 七行本 一冊

加島屋清助他版の後印本

元文四年四月十一日大坂竹本座初演の浄瑠璃。作者は、文耕堂・三好松洛・浅田可啓・竹田小出雲・千軒軒・木曾義仲とその子駒若丸、家来の樋口次郎兼光、鎌田隼人とその娘を廻る物語と、梶原源太を廻る物語を取り混ぜた構成となっている。鎌田隼人の娘の千鳥とお筆姉妹で、千鳥は梶原源太の恋人であり、お筆は木曾義仲の御台所山吹御前の腰元という立場にあり、木曾義仲と梶原源太という二つの物語を繋ぐ。大津絵が出てくるのは三段目の追分の旅籠屋の場面とその後の船頭権四郎の家の場面で、大津絵の「座頭」「鬼の念仏」「外法の梯子剃り」が出てくる。

14 ひらかな盛衰記絵尽

半紙本 一冊

『ひらかな盛衰記』初段から五段目までの絵尽。8丁表が船頭権四郎家の場面。本文にある通りに襖に「鬼の念仏」と「外法の梯子剃り」が貼られている様子が描かれている。



志水文庫の大津絵と大原神社の絵馬

15 大津絵 大日如来

軸装一幅 三枚継ぎ

蓮台に座して智拳印を結ぶ大日如来図。大津絵の大日如来は現存例が少なく、他に町田市立博物館所蔵の一例が知られている。

16 大津絵 阿弥陀仏

額装一面 二枚継ぎ

阿弥陀仏の独尊図である。阿弥陀仏が立っている朱色の丸は蓮台、その下の白緑は雲を表す。来迎印を結んでいることとあわせて、これは阿弥陀来迎図の一種と言える。阿弥陀仏の姿を描いた仏画は数多くあるが、大津絵では「」のような阿弥陀三尊来迎図が多く、独尊図は少ない。しかし、4『東海道名所記』で壁に掛けられている大津絵の一つは、「」の阿弥陀仏図と似通っている。現存しないだけで、阿弥陀仏独尊図も大津絵のパターンであったと思われる。

17 大津絵 阿弥陀三尊来迎

軸装一幅 三枚継ぎ

中央に来迎印を結ぶ阿弥陀仏、阿弥陀仏の左に蓮台を持った観音菩薩、右に合掌した勢至菩薩を描く。足下には蓮台が描かれ、蓮台は雲に乗っている。典型的な来迎図の形式である。

18 大津絵 十三仏

額装一面 三枚継ぎ

人が亡くなると、忌日ごとに法要を行うが、初七日から三十三年忌の間の忌日にはそれぞれ本尊とされる仏が定められていた。忌日にはそれぞれ本尊を描いた軸を掲げて法要を行うが、十三仏はその本尊をすべて一面に描いたものである。右下の不動明王と下から二段目中央の地藏菩薩以外は、どれがどの仏であるかわからないが、如来と菩薩の描き分けはされているようである。

19 大原神社絵馬 踊り子図

(福知山市有形民俗文化財指定)

木製

万治元年九月二十七日 平安服部太左衛門奉納
京都府福知山市三和町大原に鎮座する大原神社に奉納された絵馬。

大原神社には三十三点の絵馬が現存しており、いずれも福知山市有形民俗文化財に指定されている。奉納の年が明らかかなものの中で、慶長四年奉納の「神馬図(白馬・黒馬)」について古いのが、この万治元年奉納の「踊子図」である。平成十六年大原神社でこの絵馬を見つけた信多先生は、踊子が手にするのは櫛の枝であり、これは「愛宕参りの図」であり、これこそが、大津絵「藤娘」のルーツであると考証された。

20 大津絵 八幡神

額装一面 三枚継ぎ

八幡神を描いた大津絵は、町田市立博物館、日本民藝館がそれぞれ一点所蔵する。志水文庫を含む三点とも、山上で白馬に跨がり、弓を手にして、矢を背負うという構図である。町田市立博物館と日本民藝館の八幡神は似通っており、図録解説でも「同一作者と思われる」とあるが、志水文庫の八幡神は、構図は同じでも描き手は異なる。

21 大津絵 天神

軸装一幅 三枚継ぎ

天神すなわち菅原道真を描いた大津絵は数多く残っている。そもそも、大津絵に関するもとも古い文字資料である『似我蜂物語』で「大津あわた口の辺にて売天神の御影を」と出てくるように、天神の図は大津絵の古くからの画題であったことは間違いない。衣冠束帯姿の座像で、背後に梅と松が描かれている典型的な天神図である。

大津絵変相

22 呉春画 鬼の寒念仏

紙本淡彩 一軸

墨染めの衣を着て鐘を首から掛けた鬼の図が描かれ、「呉春」の印が押されている。呉春は四条派の画家であり、俳人。与謝野蕪村の門弟である。ここに描かれた鬼の図は、大津絵の画題「鬼の念仏」によるものである。画賛は「いましめのほのほひけり寒念仏」、「東成」の印が押されている。「東成」は、蕪村の号の一つである。この蕪村の句は、『蕪村全集』巻一によれば、〈遺草〉であり制作年は未詳の句ということである。句自体は、特に大津絵とは関連がないが、呉春は「寒念仏」から大津絵の「鬼の念仏」を連想して取り合わせた。蕪村と呉春には、それぞれに大津絵に因んだ作品が複数ある。「大津絵に糞落し行く蕪かな」(蕪村自筆句帳)など。

23 地しんどう化大津絵ふし

錦絵一枚 大津絵節は万歳楽永生作

大津絵の画題をもじり、地震とその後の世相を描いたもの。画面上部に大津絵節をもじった文章が書かれている。これは、いわゆる「鯨絵」のひとつである。「鯨」から「瓢箪鯨」「大津絵」と連想されたか。国会図書館蔵の同錦絵は、錦絵の一枚からなる「安政大地震絵」の中に綴じられている。

☆鯨絵：当時、大鯨が地下で暴れると地震が起きるといふ俗信の元に制作された絵。安政の大地震の後多く制作された。

24 狂画大津絵

大判錦絵一枚

制作年、作者未詳の錦絵。大津絵のキャラクターターである藤娘・鷹匠・槍持奴・鬼の念仏・弁慶・座頭・瓢箪鯉の猿が描かれているが、よく見ると鷹匠が藤の枝を持ち、藤娘は懐手で手紙を読んでいる。鬼の念仏が弁慶の七つ道具と奴が持つ毛槍を持ち、墨染めの衣を着た弁慶は象に乗っている。半裸の奴の横には鬼の念仏が持つ鉦が落ちており、奴が追うのは鷹に見えるが実は酒瓶に羽が生えたもので、座頭が拾おうとしているのは生首である。絵の全てがあべこべとなっているのである。狂画とは、ふざけて描いた絵、滑稽な絵という意味である。もともと、大津絵自体に狂画の性格があるが、それをさらにパロディ化したものである。この絵を幕末期の社会を風刺したものであるという解釈もある。

25 程芳流行大津絵

大判錦絵 三枚 一勇齋国芳画 伊場屋仙三郎版

十枚揃いの錦絵の内の志水文庫所蔵はこの三枚のみ。制作時期は天保十四年(1843)から弘化三年(1846)。描かれているのは、歌舞伎や読本に登場する人物であるが、画面上にコマ絵で描かれた大津絵とよく似たポーズを取っていることがわかる。こうした図柄は見立絵の一変形で、「絵兄弟」と呼ばれる。各図には狂歌替がある。十枚に描かれた大津絵は、槍持奴・釣鐘弁慶・座頭・外法の梯子剃り・鬼の念仏・鷹匠・酒飲み奴・藤娘・鬼の行水・猫と鼠である。志水文庫蔵の三枚に描かれているのは奴伊平(槍持奴)、清水冠者義高(座頭)、加藤左工門(酒飲み奴)である。

26 河鍋暁斎と大津絵

幕末から明治にかけて活躍した河鍋暁斎の絵には、大津絵をモチーフにしたものが散見される。センター所蔵の複製からその一部を展示した。

大原神社

『丹波志』(寛政六年成立)によれば、大原神社の祭神は伊弉冉尊、仁寿二年(852)三月二十五日に桑田郡野々村に鎮座し、弘安二年(1279)九月二十八日大原へ遷座、応永四年(1397)十月十三日に「造立の事有」すなわち社殿が整ったという。現在の祭神は、伊邪那美命・天照大日靈命・月読命である。

大原神社は、安産の神として広く信仰を集めていた。江戸時代は綾部藩主九鬼氏の崇敬を受け、歴代の藩主は江戸参勤の途次必ず参詣したという。また、他の大名家や公家からも代参・寄進が多くあったという記録が残る。現在の本殿は、寛政八年に綾部藩の補助を受けて再建されたものである。境内には、本殿・拜殿の他に、文化七年に建立された絵馬殿がある。入母屋造茅葺の絵馬殿には舞台が設けられ、芸能の奉納が行われていたようである。絵馬殿は京都府の文化財に指定されている。(『三和町史』参照)

大原神社の絵馬三十五点は、平成十五年二月十日に福知山市の有形民俗文化財に指定されている。

「踊り子図」もその三十五点の中の一つである。また、絵馬が掛けられていた絵馬殿は、昭和五十九年四月十四日に京都府の文化財に指定されている。

平成十八年十一月、大原神社の絵馬殿で、希波牟の会が、古典芸能鑑賞会を行い、



大原神社絵馬殿

大原神社絵馬殿内部



「藤娘」が上演された。上演に先立ち、信多純一先生が「藤娘のルーツ現わる」という題で講演をされた。写真はその時のものである。

(参考)

信多純一著 『祈りの文化―大津絵模様・絵馬模様―』

京都府天田郡、福知山に近い三和町に、天地根元造り合掌造り風のかたちでやねを直接地面に葺きおろした、古型の産屋を残す大原の里がある。

この珍しい産屋、古代さながらの別屋で子を産む小屋を訪ねて、その対岸大原神社にも詣でた。ここは安産の神様として、また養蚕の神として古くから信仰を集めた社であり、この社に参ることを大原志(オハラザシ)といい高名な神社であった。

この社殿内に入ると、両壁に黒馬・白馬二体の大絵馬が掛かっている。降雨・止雨祈願の意を込めた神馬奉納に象った絵馬奉納である。

この古格を守った大絵馬の掲げられた両壁から視線をあげると、長押しに掛かったもう一枚の絵馬が目に入る。暗闇にもそれが風俗画と見てとれ、宮司さんの好意でそれを下ろしてもらい、白日の下に見たそれは、女性二人の枝をかたがてて舞踊する景であった。

この絵を見るにおよんで、積年の課題が一気に解け、私を驚喜させた。それは絵馬と大津絵に絡まる謎を開示してくれる願ってもない資料であったからに他ならない。(中略)

大原神社のこの絵馬は、美女二人が着飾り、櫛を肩にかたがて、「愛宕参りに袖をひかれた」の歌謡につれて踊っている姿をまさに活写している図であった。大津絵の藤娘図のルーツは、間違いなくこの図柄であり、『追分絵』のそれは正統な愛宕参り女人図を踏襲しているのである。その図柄を後に、より華やかにするため、美しい藤をかたがてた娘図に変えて描いたと考えられる。(中略)

会津薬師堂の図は、藤懸氏の推定通り大津絵藤娘図になってからの図柄を採択したものだ。したがって、すくなくとも元禄頃には藤娘が生まれていたことになる。ちょうど『追分絵』の一好が「笹をば藤にかゆる絵すがた」と詠んだ通りの、櫛から藤に代わる図柄の変化が起こっていたのであるが、その図はまた会津の絵馬額の画題になり得る性格のものであった。す

なわち、この図は「愛宕参り」という神事にかかわる図であったからである。(中略)

この愛宕参り図が、何故福知山近くの大原神社に奉納されたのか明らかでない。奉納者は京の人である。安産祈願であるかも知れないが、絵柄の祈りの心からすると、撰社に火の神社があり、火難除鎮火祭が行われることとつながりがあるのであろうか。

大原志(おぼらざし)

『江戸時代語辞典』(角川学芸出版)より

丹波国天田郡大原(京都府福知山市三和町大原)にある大原神社で五月二十八日に行われる祭祀に参詣すること。養蚕の神として信仰された。三月二十三日は春ざし、九月二十三日は秋ざしといって、春秋にも行われ、神前に甘酒を供える風習があった。

『源三位頼政』(貞享三年頃上演 宇治加賀掾浄瑠璃)

源頼政が平等院で死んだ後、娘のたつたの前は木津に隠れ住んでいる。父の敵が矢代の庄(ここは元は源頼政の所領であった)を給わつたと知り、「おぼらざし」の姿で矢代の庄へと向かう。矢代の庄は現在の亀岡市周辺。さらに先にある大原神社へ大原志に行くと偽って京都の丹波口から丹波街道を通って矢代の庄へ向かうのである。

早太悦びそれよりも。女房姫君ぼたんの姫おぼらざしにいでたゝせ。ひとめしのびてたんばぢや矢代のしやうへと急ぎける

たつたのまへ道行

ひよくれんりは。今の世に。ことばのこりてわが恋のたとへにひくとつげやらば。かみもほちつゝまもらんと。おぼらざしなるたび出立。

産屋(うぶや)

大原神社のある三和町大原には、地区を流れる河合川の傍らに、天地根元造(茅葺の切妻屋根を地面に伏せたような形)で造られた産屋が残っている。現在この辺りは「美しき命の源流うぶやの里・大原」として京都府景観資産に登録されている。産屋も昭和六十年

五月十五日に京都府の有形民俗文化財に指定された。



産屋

志水文庫の大津絵と大原神社の絵馬「踊り子図」 目録

(二〇一八年二月五日)三月三〇日

神戸女子大学古典芸能研究センター展示室)

二〇一八年五月八日公開

編集 神戸女子大学古典芸能研究センター

(展示企画・図録作成担当 非常勤研究員 川端咲子)

〒650-0004

神戸市中央区中山手通二丁目23-1